

金葉和詩集

金葉和詩集

ノートルダム 古典叢書第三回配本公夏筆本「金葉和歌集」
清心女子大学

昭和四十二年七月十日発行

刊行責任者

シスター・セント・ジョン

翻刻責任者

赤 羽 淑

発行所

岡山市伊福町二丁目一六の九

ノートルダム 国文学研究室古典叢書刊行会
清心女子大学

（振替、岡山・七二三）
電話五二一一五五 内線五七

印刷所

姫路市南町一八岸本印刷株式会社

正宗敦夫文庫蔵「金葉和歌集」解題
公夏卿筆本

一、書 誌

本書はもと桂宮家の蔵書であつたといわれるが、昭和三十一年、故正宗敦夫教授の所蔵となつた。奥書はなく、桂宮家歴世親王に伝えられたことが知られていただけであつた。しかしながら桂宮家断絶の折に、明治十五年四月付で桂宮御附宇田淵の調製した「桂宮御蔵品取調書」によれば、「書画 臣下之部并唐書」の項に

一、金葉集 為家卿筆 二冊 壹箱

一、同 公夏卿筆 同 同

とある。おそらく本書を示すものであらう。外箱は明治以降のものとと思われる桐箱で、蓋表中央に「金葉集 公夏卿筆」と墨書してある。

体裁は、縦二十六・五センチ、横十九・二センチの袋綴一冊、表紙は布目鳥の子紙、薄茶色に金の草花唐草紋を押捺、外題内題ともに欠けている。

本文用紙は斐紙で、冒頭に「正宗敦夫文庫」の方朱印がある。遊紙が前後に二丁ずつあり、墨付九十六丁、第三紙表より始まり第九十八紙裏で終わる。一面十一行又は十二行、一首一行書き、各卷最後の歌は二行書き、特色ある書体で一面に三首から四首記されている。

二、筆者

同じ筆者になる「金葉和歌集」がもう一本正宗文庫に所蔵されており、その奥書に

此集令付属書写山寺住侶実祐

已講之所如件

于時天文四年初陽上浣候

入道前中納言藤臣暮齒八十二（花押）

とあり（巻頭写真参照）、同書第一紙の右肩に「金葉集橋本殿公夏卿判有之」と墨書し、琴山の墨印のある極め札が貼付してある。これによって本書の底本に用いた奥書のない本も同筆で、橋本公夏の筆写によるものであることが証される。また、本学正宗敦夫文庫に公夏筆の「新勅撰集」があり、その奥書も傍証となるので掲げておこう。

本云

延応元年七月十一日以京極中納言入道自筆本書写畢

旨大永第八晚夏中浣凌七十五歳之老眼

遂一部廿卷之書功畢

入道前中納言藤臣（花押）

右雖為相伝秘本懇志異于他之条

令附属書写山寺住侶実祐堅志

跡也

天文第七之曆八月六日

左近衛權少将藤原朝臣（花押）

公夏の八十二才と七十五才の筆跡を比較することによって、奥書のない本書の書写年代の見当がつけられよう。奥書のない「金葉集」を公夏筆A本、奥書のある「金葉集」を公夏筆B本として区別したが、A本はB本に比べて筆の乱れが少なく、ややふくらみのある力強い書体であるので、奥書のある二本より以前に書写されたのではないかと思われる。公夏筆の「金葉集」とくにA本の方はかなり厳密に定家かなづかいに拠っている。「新勅撰集」の奥書に、定家の自筆本の写しを親本とし、家の相伝秘本として書写した旨が記されているのでそのような結果がでたのであろう。

橋本公夏は「諸家伝」によると、

公夏（從二位前權中納言公國卿男）
實權大納言実久卿男

享徳三（甲戌）年生、文明八年正月六日正四位下、文明十四年月日参議（左中将如元）△于時正四位下▽、同十六年六月八日從三位（三十一才）、長享三年五月十日權中納言（三十六才）、延徳三年十二月十八日正三位（三十八才）、同四年三月二十四日辟（三十九才）、永正十七（七イ）年三月日出家△（六十七才） 依病云々▽法名反阿在播州

とある。前掲の公夏筆「新勅撰集」の奥書に挿紙があり、

一条清水谷大納言実久男

橋本中納言公夏

橋本中納言公夏男

一条清水谷公松（侍從）

とある。橋本家は公国で血脈が絶え、清水谷（一条）家から公夏が橋本家に入って公国の後をついだが、清水谷家の方も実久（公夏の実父）で後が絶え、公夏の子公松が清水谷家を継いでいる。「新勅撰集」の加証奥書を書いているのはこの公松であろう。

公夏は六十七才で出家して播州に住んだので、「金葉集」B本と「新勅撰集」の奥書に名の見える書写山の住侶実祐と交渉があったと思われる。公夏は教養の高い几帳面な性格の公卿であつたらしく、「金葉集」二本は神経のとどいた統一のある表記法を用いている。諸伝本の中ではもっとも誤記誤脱の少ないものの一つではなからうか。

三、本文の系統

いうまでもなく金葉集は初度本・二度本・三奏本の三系統の本文が残されており、とくに二度本に異本が多い。金葉集の諸本に歌数の異同のあることに着目されて、それが中度本の撰集過程によるものとして五種に分類されたのは井上通泰氏（「校訂金葉集」）であつた。氏は、歌数の多いものから少ないものへと五段階に分けられたが、公夏筆本の系統、すなわち統群書類従所収初度本は、中度本の第一種に数えておられる。松田武夫氏も大体この立場をとられ、二度本を撰集過程から三類に分けられた。すなわち

第一類 八代集よりも歌数の多い本

第二類 八代集抄本・八代集版本系統の流布本

第三類 流布本よりも歌数の少ない、いわゆる精撰本

である。この分類によって、公夏本を「最も初期に出来た二度本」（「金葉和歌集の研究」一九六頁、昭一九・一一）と位置づけられた。なおこの系統に属する本として、統群書類従所載の初度本・内藤久寛氏蔵鳥丸光広筆本・松田武夫氏蔵園林文庫旧蔵本・押小路家旧蔵本・岡田氏蔵本等をあげておられる。

その後「西日本国語国文学会翻刻双書刊行会」から目加田さくを氏によって細川家旧蔵中御門宣秀筆「金葉集」（昭四一・五）が紹介された。宣秀自筆本に光広が奥書をしたためたもので、目加田氏は統類従本系統の

祖本と推定しておられる。この本については、すでに松田武夫氏が「勅撰和歌集の研究」(昭一九)において、伝鳥丸光広筆本を紹介された折に、井上通泰氏の添状を引用しつつ

続類従本は、光広が宣秀自筆本に奥書を加へたその本の転写本に多分拠ったものと考へられるのである。又この本を光広自筆とすれば宣秀自筆本を写したものと想像される可能性を有するわけである。かかる意味に於いて、宣秀自筆本が出ない限り、この本はこの種の類本中比較的伝写の系統がはっきりする古写本なる点で、学的価値のあるものである。(二九九頁)

と、宣秀自筆本の出現を期待しておられたものである。

公夏筆本と宣秀筆本を比較するに、同類の系統には属するが別の祖本から出たものと推定される。宣秀は中御門宣胤の子で、公夏とは同時代の人、公夏の方が十五年長である。公卿補任によると、宣胤が辞官した永正八年に公夏、宣秀も名を連ねている。すなわち、

権大納言正二位中御門 藤宣胤 七十

権中納言正三位中御門 藤宣秀 四十三

前権中納言正三位橋本 藤公夏 五十八

とある。同時代の筆者になる二本の金葉集の書写の前後は不明である。公夏筆B本は天文四年に書写されたが、宣秀はそれ以前享祿四年六十三才で薨じている。公夏筆A本を公夏の出家した永正十七年以後の書写とすると、大体同じ頃に成ったものである。同系統の伝本で同時代の公卿の筆になりながら、祖本が違うために公夏筆本と宣秀筆本にはかなりの異同が認められる。

この系統の伝本の中で公夏筆本はどのような位置を占めているであろうか。松田武夫氏は、続類従の初度本の範疇内に入れて考えられる六本のうち、伝鳥丸光広筆本・園林文庫旧藏本・押小路家旧藏本・岡田氏藏本は

同性質の本であり、それに対して、伝公夏卿筆本は異本的立場に立つ性質を有し、統類従本は両者の中間的性質を備える本文であると認められた（「金葉集の研究」二〇六頁）。この六本のうち、園林文庫旧蔵本・押小路家旧蔵本の二本は見る事ができなかったが、宣秀筆本（以下九大本と称する）・岡田氏本・統類従本の各本と公夏筆の二本を比較してみよう。

つぎの表は、公夏筆A本を基準にして欠脱の有無や順序の異同をしるしたものである。他の系統の諸本との関係をみるために国歌大観の番号を括弧内に記した。

歌序の異同や欠歌の有無という点から同系統の伝本と比較すると、当然のことながら公夏筆A本は公夏筆B本にもっとも近い。B本はA本よりも二首少なく、順序の相異が一個所あるだけである。九大本・統類従本・岡田本の三本は類似の性格をもって公夏本に対するが、九大本と統類従本が接近しており、岡田本は少し特異である。統類従本には備考に示したごとく六個所に欠脱があり、九大本によって補充することができるが、九大本には巻四に二個所この本のみの歌序の相異があつて、統類従本の祖本そのものと見做すことには疑問が残る。岡田本はこの本のみにみられる欠歌が十首あり、本文脚注の校合が示すごとく、誤記も比較的多いのであるが、その中には異本群の欠歌と共通な現象もあつて、欠歌のすべてをこの本のみの誤脱とみることはできない。

つぎに本文校合の結果からこの系統の伝本の相互関係をみよう。公夏筆のAB二本は同筆でありながら表記法はかなり異なっている。漢字とかなが入れ替わっている部分が非常に多く、かなづかいも違っている。B本の方が脱字や誤記が多いのであるが、つぎにあげるようにA本の誤りを訂正している個所もある。

公夏筆A本

B本・九大本・統類従本・岡田本

二七 のこせそと思

のこせそと思

二九〇 さを鹿の群

さを鹿の声

四一六 千世かな

御代かな

五一 恋わひぬ

恋わひて

また、A本の特色である作者注がB本では半数ほど欠けている。これらの事情から、A本から直接B本を写したことは考えられず、その中間にある本が介在していたか、あるいは他本も参照しながらB本の書写をおこなったと見るのが妥当であろう。しかしながら、他の伝本のどれよりもA本とB本は近い関係にある。国歌大観番号の三一四・三二三の順、五三一は五三九の次というのは二本のみである。（第二表参照）

九大本と続類従本を対校してみた結果も、前者が後者の祖本そのままでないことを示している。公夏筆本A・B、岡田本、続類従本に対して九大本のみがもつ異同や誤記が十六個所に見られ、それと同数ほどが、岡田本と共通している。九大本・続類従本の二本は他本に比較すればもっとも近い関係にあるが、別の本の性格も混入しているのである。

以上のことから、公夏筆本と同系統の三本との関係や相異をまとめてみると、

一、公夏筆本A・Bおよび九大本・続類従本は同じ系統ではあるが親子関係ではない。岡田本は公夏筆本・九大本二者の性格も合わせもちながら特異である。

二、公夏筆A本の歌数がもっとも多く、三本にない九首を含んでいる。

三、公夏筆A本にない四首が九大本・続類従本に含まれ、岡田本もそのうちの三首を含んでいる。

四、三本の共通現象が国歌大観本（二十一代集版本・八代集抄本・八代集版本系統の流布本いわゆる二類本系）の順序に一致し、あるいはつながる個所が三例、欠歌と共通する場合が一例ある。

五、三本の共通現象が三類本系の異本群と共通する場合が九個所にある。

六、九大本・統類従本の二本が異本群の現象と共通する場合が二個所にある。

七、岡田本特有の現象で国歌大観の順序に一致する場合一、欠歌の状況が異本群と共通する場合が二個所にある。

となる。これをさらに撰集の過程や他の伝本との関係を考慮に入れながら具体的に述べてみよう。

公夏筆本系統の本が一類本とよばれる理由は二類本・三類本に比して歌数が多いこと、初度本の歌を含んでいることである。表に示したように国歌大観にない歌を七十首ないし七十一首含んでおり、そのうちの四十八首（公夏筆本）ないし五十首（岡田本・九大本）が初度本と重複する。公夏筆本の他本にない九首のうち八首は国歌大観と重なるが、一首は初度・二度・三奏本のいずれにも属さない。それは、源俊頼の「題不知」

雪ふれは谷のかけ橋うつもれてこすゑそ冬の山ちなりける（公夏本・三六四）

である。九大本・統類従本は公夏筆本にない四首（岡田本はそのうちの三首）を含んでいるが、第一表の備考欄に示したようにそれらは初度本と二首、二度本と二首（岡田本は一首）それぞれ重複するものである。このような歌数上のかかわり方からいえば、三本の方が初度本に近く、公夏筆本が二類本に近い関係を有することになる。また、公夏筆本がどの本にもない歌を含むことによって、撰集のプロセスを解明する資料的価値をより多く有していることを証している。

他本との関係について(三)以下にあげたことは、この系統の本が二類本や三類本とどのようなつながりをもつかを究明する手がかりとなるであろう。公夏筆本に対して三本が共有する現象は国歌大観本に関係のある場合が五例ある。三五九の次三六四という歌序は国歌大観の三〇〇につながり、五八六の次五九五という歌序は、国歌大観の五三〇・五三一へとつづき、七五七の次七六四は同じく七〇三・七〇四へとつづく。また、三七三・三七五・三七七・三七四・三七六の順序は、国歌大観では欠・三一一・欠・三一四・三一五となっている。

五二八は三本とも欠であるが、国歌大観でも欠となっている。このような現象は、公夏筆本の配列を変え、削除して三本の状態となり、そのまま国歌大観本へつづいていく過程を示しているようである。すなわち

公夏筆本↓三本↓国歌大観本

という切継の順序を想定させる。しかし、巻一の七・六、六九・六八の順、巻三の三一六の次に三三〇という歌序は、公夏筆本が国歌大観本と一致する例であって、公夏筆本と三本のいずれが二類本系統により近いかは簡単には判じがたい。

つぎに公夏筆本に対して三本の共有する現象が異本群と共通する場合が九例ある。（どの本と共通するかは第二表参照）、九大本・続類従本の二本が異本群と共通する現象が二例、岡田本のみの現象で異本群と共通するのが二例ある。公夏筆本も異本群と共通する場合が三例あり、公夏筆A・B二本と三本を含めて異本群と共通する例が二十もあって、この系統の本は欠歌や歌序に関する限りでは二類本より三類本に接近しているといえることができる。また、公夏筆本の歌序の転倒が異本群の欠脱に移行する場合もある。国歌大観番号で、公夏筆本の三一四・三一三の順は他本の三一三欠へ、五三一は五三九の次という順は五三一欠へ、七〇四は七一〇の次という順は七〇四欠へ移行するといった工合である。この歌序の転倒が欠歌に移るのは撰者の手になるのか、書写の過程に生じたのかは考察を要する問題であるが、現象面から見た場合は、一類本↓二類本↓三類本という順序よりも一類本↓三類本と連結する方が自然なのである。しかし、この問題は歌序や欠歌の有無だけによって一方的に判断できぬことであって、他本より多い歌の内容が問われねばならない。

四、本書の内容

公夏筆本が金葉集の諸伝本の中で特異な位置を占めるのは、歌数が多いこと、その中に初度本や三奏本の歌

を含むこと、切継の過程で削除された歌が混っていることなどであろう。それを二度本の撰集過程における現象とするならば、どの段階に位置するものであろうか。この問題は、初度本から三奏本へと動いていった俊頼の撰集意識を分析することによって、ある程度説明することができよう。撰集の各段階において、歌風・作者・配列などにそれぞれ基準があったようであり、また全体に亘っての撰者の意識の揺れにもある傾向が認められるのである。

右の考察に入るに先立って、公夏筆本を初度本から三奏本へ移行する経路の中に位置づけるために第二表を作成してみた。これは、橋本不美男氏の図表（『大宮御所「金葉和歌集」解題』（昭和四一・八）を正宗文庫所蔵の写本十四種と初度本（伝為相筆）・八代集抄本・三奏本（ノートルダム清心女子大学）に対用してみたものである。

国歌大観本を基準にし、初度本と三奏本を首尾においたが、二度本の諸本は第一類・第二類・第三類という撰集過程による分類や伝承の先後ということを考慮に入れずに、ただ共通現象の重なりと隣接関係のみを中心に配列した。横線は欠巻落丁のための欠脱を示し、△印は順序の異同が欠歌に連なると推定される場合に使用した。

さて、公夏筆本の位置を表によってさぐると、巻による出入はあるが、巻五までとそれ以後に大きな差が認められる。前半の巻二・巻三・巻四は、初度本・八代集抄本と異本群との中間的な性質を示すが、巻六以後はほとんど下の異本群に共通の現象をみせている。これは欠歌の方から見た現象であるが、国歌大観本にない歌の他本との関係はどうであろうか。公夏筆本の巻別歌数を他本と比較するとつぎのようになる。

計	十 (雑下)	九 (雑上)	八 (恋下)	七 (恋上)	六 (別)	五 (賀)	四 (冬)	三 (秋)	二 (夏)	一 (春)	巻 別	諸 本
											国歌大観本	
717	75	91	103	77	17	29	52	109	66	98		国歌大観本
						34	63	149	92	140	初	度本
						+5	+23	+64	+26	+68		
							-6	-12		-13		
765	69	91	99	71	17	30	58	129	83	118	公	夏A本
+70			+1			+1	+7	+22	+17	+22		
-22	-6		-5	-6			-1	-2		-2		
670	63	88	95	71	17	29	49	103	60	95	為	忠本
+8			+8									
-46	-12	-3	-7	-6			-3	-6	-6	-3		
659	63	89	85	60	25	28	52	111	50	96	三	奏本
+150	+1	+12	+15	+15	+11	+4	+14	+36	+11	+31		
-208	-13	-14	-33	-32	-3	-5	-14	-34	-27	-33		

国歌大観にある歌で各本にないものを(一)、国歌大観にない各本の歌の数を(十)で示した。公夏筆本は国歌大観にない歌を七十首含んでいるが、そのほとんどが巻五までに集まっている。その七十首は初度本・三奏本と重なるものを含み、またほとんどが黒川本の三奏本頭書（ノートルダム「古典叢書I」参照）と重複する。これを表にして示してみよう。

清心女子大学

計	八	五	四	三	二	一	卷
70	1	1	7	22	17	22	国歌大観本にない公夏本の歌数
48			4	18	11	15	初度本と重なる歌数
2				1		1	三奏本と重なる歌数
59		1	5	21	15	17	三奏本頭書と重なる歌数

初度本と重複する歌が多いのは、初度本から二度本へ移る過程の一段階を示すものと見ることも可能である。しかし、この現象が巻五までに偏っているのは現存する初度本の伝本の巻六以後が欠けているのと関係がありそうである。井上通泰氏はすでにこの問題に着目されて、「金葉集ノ古写本ハ上下二冊ヨリ成リ上巻ニハ春夏秋冬賀ノ歌ヲ収メ下巻ニハ別離・恋上下・雑上下ノ歌ヲ収メタリ。サテ彼所謂初度本ノ他本ト異ナルハ賀以上即古写本ノ上巻ニ当レル部ノミニテ別離以下ハ全ク三種本ニ同シ。恐ラクハ下巻ノ欠ケタリシヲ人アリテ第三種本ニヨリテ続貂セシナルベシ」(前掲解題)と説いておられる。つまり、書写の段階で上下別の系統の本を一つにしたと解されたのである。この説を裏づけるものとして、金葉集の古写本とくに室町以前のものには上・下二冊に分かれているものや、そのいずれかを欠くものが比較的多いことがあげられる。続群書類従のいわゆる初度本系(公夏筆本もその一種)は、他本に比して初度本に近い関係をもつことはたしかであるが、

それがそのまま撰集過程の一段階を伝える完本として見ることは無理なようである。

ここに一つの疑問が提出されよう。俊頼は前半の切継は頻繁におこなったが、後半はそれに比して出入の度数が少なかったのではないかと一応疑ってみる必要がある。二度本と三奏本を比較して俊頼の切継の意識を辿ってみると、たしかに前半と後半では粗密の差がみとめられる。しかし、それは公夏筆本の前半がプラス六十九首で後半がプラス一首という現象にみられる落差ほどはなはだしいものではない。やはり書写の段階での不統一と見るのが妥当であろう。

これを傍証するのは三奏本金葉集の頭書である。三奏本の頭書については『黒川家旧蔵三奏本「金葉和歌集」解題』（前掲叢書）で述べたので、公夏筆本に関するところについてのみふれることにする。頭書は「イ本有此等」とあつて三奏本に採られなかった歌を片仮名で記したものである。その二百六十一首のうちに、初度本の歌四十五首が含まれ、その中の四十二首までが公夏筆本と重なるのである。初度本のうち二度本・三奏本に採用されなかったのは百四十五首であるが、その中頭書に採られた四十五首のうちの四十二首が頭書と公夏筆本において重なることは注目すべき事実である。頭書のもとになった「イ本」というのはあるいは公夏筆本系統のものではないかという推測を可能とするが、その反証となるべき事実が二つある。すなわち、公夏筆本にない初度本の歌三首と、二度本の歌を十四首含むこと、巻六以後に初度本・国歌大観本・公夏筆本にない歌を十四首含んでいることである。このことは、公夏筆本以外に頭書の底本となったものがあるのではないかと思わせるし、また公夏筆本系をも含めた複数の本からの集録かもしれないと推定させるのである。また巻六以後は公夏筆本の前半と共通する性格の本の存在をも暗示するのである。三奏本で頭書のある本は、吉田幸一氏蔵の伝為遠筆本・黒川家旧蔵本・高松宮家蔵本の三本であるが、そのうちもっとも古い伝為遠筆本は公夏筆本や九大本と同じく室町期のものであることは頭書と何か関係がありそうである。頭書と公夏筆本のみにある七十首

の性格を比較するために、初度本・三奏本をも含めて重なりの状況を示してみよう。

一、公夏筆本と初度本と頭書が重なる歌

四二首

二、公夏筆本と初度本のみが重なる歌

五首

三、公夏筆本と初度本と三奏本が重なる歌

一首

四、公夏筆本と三奏本のみが重なる歌

一首

五、公夏筆本と頭書のみが重なる歌

一七首

六、公夏筆本のみにある歌

四首

以上の如くであるが、(四)、(六)は従来の「金葉集」には知られていないのでその二十一首をつぎに紹介しよう。

初度本・国歌大観本・三奏本になく公夏筆本にある歌

巻第一

2 庭もせに引つらなれるもろ人の立るるけふや千世のはつ春(頭書一)

源俊頼朝臣

14 いつしかとすゑの松山かすみあひて浪とゝもにや春はこゆ覧(頭書九)

源俊頼朝臣

梅花散水といへる事をよみ侍ける

源俊頼朝臣

25 ちる花は水の岩間によとむとも香はなかれてやせゝにとまらん(頭書一四)

百首歌の中に若菜の心をよめる

源俊頼朝臣

29 かすかのゝ雪をわかなにつみそへてけふさへ袖のしほれぬるかな

落花の心をよめる

源俊頼朝臣